

二日目は少し遠出をして、東御市の「海野宿」を目指しました。頂いた資料をまとめました。



海野宿の歴史は古く、寛永二年(1625)に北国街道の宿駅として開設されました。中山道の追分で分岐し、小諸を経て海野、上田、善光寺から、越後に入り直江津に至る延長約140kmにおよぶ日本海側と太平洋側を結ぶ重要な街道でした。加賀の前田家や、北陸諸大名が参勤交代で通った道であり、江戸との交通も盛んで善光寺への参詣客も多く海野宿は相当のにぎわいを呈していたと言われています。江戸時代末期から農家の副業であった養蚕と蚕種の製造が盛んに行われ、明治に入り養蚕を広め、宿場時代からの広い部屋は養蚕のために利用され、総二階建ての蚕室造りの家屋が現在でも残されています。

「海野宿」の入口には真田家の守護神である白鳥神社があり、樹齢700年以上といわれる巨木が立っていました。そこからほぼ直線に約650mの道筋がある「海野宿」は、全くの異空間であり、異次元の世界でした。幅のある通りには片側に水路があり、庭木や柳の植栽が美しく配されています。左右に瓦屋根で、黒ずんだ頑丈そうな木造、土壁に守られた古い家屋がぎっしりと並んで続いています。以前見学した奈良井宿の庶民的佇まいに比べると産業が盛んだっただゆえに、富裕な、また、格式が感じられる街並みとなっています。その日は観光客はまばらで、静けさが際立っていました。



資料館に入り、江戸時代からの養蚕業の家の様子を詳しく見る事ができました。蚕の成長する様子、糸から織物へと作られていく不思議さなど、面白く感じました。また、旅人のための旅籠だけではなく、公用の荷物、通信物も扱う機能をもつ問屋場でもあったとのこと。信濃出身の俳諧師小林一茶の「夕過の白の笏の寒哉」の句碑もありました。きっとここにも投宿したのでしょう。中の写真の右手の屋根の上の白い壁のようなものは「袖うだつ」とのことで、防火壁の役目をします。

畿内に都があった時代は北陸道も北国海道と呼ばれていて、高山右近らキリシタンが連行された道筋だと聞いていますが、江戸時代になると、この海道は江戸への「脇街道」とも言われていたといいます。奈良井宿ではキリシタン禁制の高札を見、和田宿では公家、武家、庶民と、それぞれの身分による宿の姿をみました。古い街並みが大切に保存されているのを見ると、驚くと共に、日本らしい美しさに感動します。人間の営みの健気さ、歴史の流れを感じた「海野宿」への旅でした。